

情報と図書館

平岡武夫

情報と図書館を、郵便によそえてみた。郵便には国境がない。外交断絶の国にも、戦線の彼方へも、郵便物ははこばれてゆく。情報なしに人はすごせないのである。図書も立場や国籍を越えて人人に読まれる。ところで、手紙は特定の相手に伝達されると、郵便局の任務はおわるけれども、図書は万人のために提供されるもの、いつまでも多くの人に読まれることを目的としているので、図書館はどの一冊の本からも完全に解放される日はない。あふれるほどに詰めこんでいることは、郵便屋さんの鞆も、図書館の書庫も同様であるが、鞆は配達をおわれれば空になる。書庫はたまるばかりである。

情報の激増に、今に地球がその重さにたえられなくなるであろうと、オッペンハイマー博士をして嘆かした。この嘆きを真正面からかぶっているのが図書館である。何とかしなくてはなるまい。加えて、どの一つの図書館も激増する情報のすべてを集めることはできないから、いきおい他の図書館に借らねばならず、他からも借りられねばならない。相互協力の体制化は不可避である。郵便でいえば、国際郵便の相互関係に相当しよう。しかし図書館の現状では、自分の所だけで手に余っているのに、よその分まで連帯関係をもたねばならぬとしたら、これはもう人力の及ぶところではない。

飛脚から汽車・航空機・衛星へ、郵便業務の機械化はいちじるしく進んでいるのに、図書館の方はなお旧態依然たる所がある。複写だけは筆写から乾板・ライカ・マイクロと移って、1・10・100・1000と、一日の複写量の単位を飛躍させているが、分類・検索の方は、依然として難渋している。各機関・部局の分類が伝統的に不統一であることも、大きなガンになっている。郵便局は前に配達局名を書かせようとして失敗したが、山川の地勢や歴史的沿革による地域名はそのままにしておいて、新たに工夫した001から999に至る郵便番号の方法は成功している。図書館でも、各機関・部局の伝統的の分類とは別に、根底から発想を異にする方法が考え出されるであろう。それが即ち機械を使いこなすことにもつらなる。

図書館はいま、関係する情報量の激増と、世をあげての機械化と、内外二つの要因から、激動期に入っている。これに効果よく対処するためには、じっくり考えて、それを試行する余裕が、人にも、時間にも、経費にも、なければならない。図書館を現状のままで追いついては、利用者が情報世界に落伍するうき目を見ること必定であろう。